

## 随想

## GDH (国内総幸福度)

## 子どもの言葉はそのまま詩

(ワンチュク国王の来日とあわせて感じたこと)

加藤 宏光

がんぜない子どもは親にいろんなことを問い掛ける。

先日(十月三十日)の朝日新聞読者の声の欄に以下のような意見が寄せられていた。

《先日、書店に行くと二、三歳くらいの子が母親らしい女性に『今日は借りるだけ?』と尋ねていた。どうやら書店と図書館の違いがわかっていないようで、女の子がとても可愛く思えた。女性は『ここでは借りられないの』と答えていた。私はもう少し丁寧に『ここは本やさんを借りる場所』と説明すればよいのにと感じた。

また別の日に公園で池の噴水を見ていた子どもが、一緒にいた大人に『あれ花火?』と聞いていた。そこでも大人は噴水と花火の違いを説明しなかった。これも子どもの興味を満足させるだけの答えを与える余裕が親であれば、子どもの情操はもっと豊かになるであろうに:》と

いったものであった。著者が大阪市立家禽試験場に勤務していた当時のことである。大阪市の辺縁にある職場への通勤で乗車していたバスは、終点前ではガラガラである。そこに二歳ばかりの男の子をつれた親子が乗ってきた。男の子は外を見ながら片言で母親に語りかける。

『赤とんぼが、飛んでるね!赤とんぼが、お空に飛んでる!赤とんぼが、虹に飛んでるね!』母親が何と答えていたかは記

憶にない。

子どもが語りかけると、言葉がそのまま詩なのである。目に映ったものをただ無心に語りかける言葉の美しさに「詩」を感じて以来、大人の詩に心を動かされることなくってしまっ

た。自我をも意識しない時代に、目に映るものを母親に語りかけるような心情は、自分を意識してしまった人間には届かない世界になってしまっていることを改めて感じさせられた遠い記憶である。

生き残るためにという大儀のもとに自己主張を強いられる大人が、東日本大震災という悲劇の下にふと心の奥に隠れていた幼い時代の何かを表に引き出してくれたのかもしれない。大震

災に際して悲劇の舞台に立たされた方々が、見るもの聞くものに涙させるシーンを数々見せて下さったことが、先の意見を讀んで、ふと遠い日の思い出と重なって脳裏に浮かんだものである。

先日、ブータン国王ご夫妻が新婚旅行で訪日された。来日当初はさほどのブームではなかったが、ご訪問の先々でのお振る舞いと幸福度を前提としたGDHならぬGDH(国内総幸福度)という指標が相まって、人気が一気に急上昇した。GDHを目標とする方針は先代国王の時代に掲げられたそうであるが、『現在九七%の国民が幸せとと思っている』という報道で、国を挙げた歓迎の様子となった。この国の国民

総所得は年間一六万円ほどで最貧国の一つだそうである（十一月二十日「京都新聞」のコラム）。

GDPを中国と争うわが国の指標が、金・金であることへの反動と拡大する経済格差に疲れた人々が心の潤いを求めた流れがこの歓迎の下地になったものであろうか。

今朝（十一月二十九日）のテレビ放送「とくダネー」で、国王ご夫妻についてとGDHに関する報道があった。その折、コメンテーターはGDHの評価に関して《アンケートの標本抽出に偏りがある点、貧富の差が大きい点、幸福度の評価基準に偏

りがある点、国王の訪問は観光客の招致に繋がる大事な外交であるから、ご滞在中の姿勢にはそれなりのものがあって当然》等を取り上げて『過度に評価しすぎることへの危惧』を述べていた。

有り体に言えば、どのようなアンケートにも同様の問題はありと考える。たしかに外交の場ではあるのかもしれない。しかし、国王ご夫妻の礼儀正しさや思いやりは、折々の行動・動作から滲み出ているし、それを肌で感じたからこそ国を挙げての大歓迎になったのであろう。ブータ

ンという国が総人口で約七〇万人という小国であることを考え合わせても、来日されたワンチュク国王ご夫妻の姿勢を介して私たちが得た貴重な教訓を最大限に評価しないコメンテーターの姿勢にこそ《公正な立場を守っているのだ》というある種の偏りを感じるのは著者だけであらうか?!

それはそれとして、先に述べたような著者の若かった頃に見た子どもの心が今の子どもにもそのまま残っているのだろうか?? 携帯電話を持たされ、知らない大人はすべて疑うことを教えられ、テレビゲームと家庭内の勉

強に道を定められた子どもたちが、かつてのような詩そのものと言える感性を持ち続けているかどうかを不安に感じざるを得ない。

今はもう子どもたちの心に詩心がないとすれば、いみじくもこの度ブータン国王ご夫妻が、短い訪日の間、被災地や京都において、その立ち振る舞いで私たちに与えてくださった情操へのノスタルジーこそが、われわれがこれから思い起こさねばならない貴重な教示ではないかと感じながら報道を聞いたものである。